北のとびら

HOKKAIDO
ARTS FOUNDATION

特集

コミュニケーション教育フェスタ2011

インタビュー

彫刻家 渡辺 行夫・現代美術作家 池田 緑

No.
91
JANUARY 2012

『山のできごと』（H85cm）鉄　2010年

Art Gallery

Vol.22 金属造形

北海道のアートシーンを担っていく
若手アーティストを、
紹介します。

草原の風を感じる表情豊かな鉄

生まれ育った故郷の風景を思いながら制作をしています。

広い草原、輝く山、心地いい風、そよぐ草花、静かな星空。その中で生活し、故郷を離れて暮らす今でも、私にとってそれは一番大切なものです。それらを思うときにあふれだす形を作品にしています。

私は、鉄を主な素材として制作していますが、鉄に熱をかけ、叩いたり曲げたりさまざまな手を加えることによってつくられる、柔らかな曲線や曲面、温かく優しい色や質感は、私が自然の中から得た感情を形にしていくうえで、欠くことのできない重要な要素です。

表情豊かな鉄という素材の力を借りながら、私の故郷の美しい風景や、気持ちのいい空気が伝わるような作品をつくっていきたいです。（吉成）

CONTENTS

北のとびら

ロゴのコンセプト

生きる勇気と喜びをもたらす
文化の普遍的なチカラ
"精神的な豊かさ" "活気" "感動"を
3つのプラスで表現しています。

No. 91
JANUARY 2012

東日本大震災の被災者の皆様に
心よりお見舞いを申し上げます。
北海道文化財団は、文化芸術活動を通じて
さまざまな支援活動に努めてまいります。

表紙協力／ユニット・リトルバレエ

02 アートギャラリー［第22回］
吉成 翔子（金属造形作家）

04 インタビュー
渡辺 行夫・池田 緑

06 特集
コミュニケーション教育フェスタ2011

08 ステージ
文化の宅配便「ユニット・リトルバレエ」
（大空町東藻琴公演）

10 地域からのお便り
・文化交流事業［発信交流事業（助成）］

11 アートのチカラ
・青森県八戸市

12 この街この人［第18回］
広尾町

14 共催事業レポート
旭川市／劇団 BREATH
砂川市／空知演劇フェスティバル

15 Information

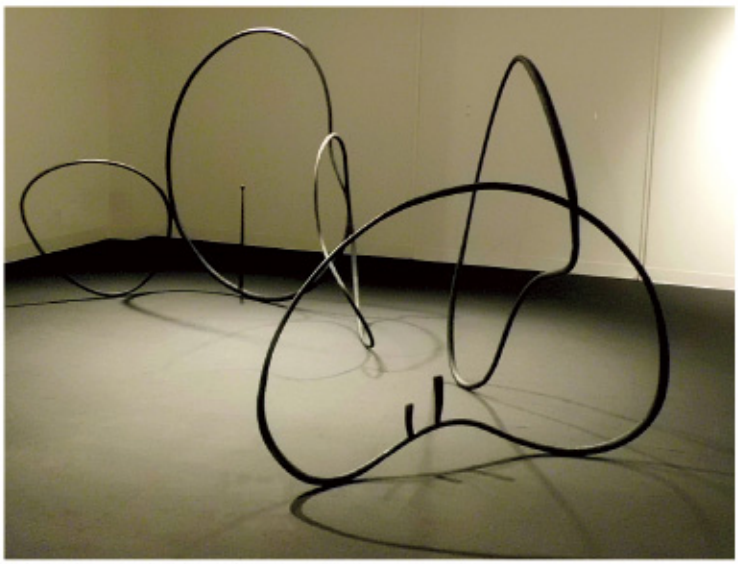
『北のとびら』は、全道の文化ホール、文化施設などで
ご自由にお持ちいただけます。
※定期的に購読をご希望の場合、当財団へお問い合わせください。

VEGETABLE OIL INK　R100

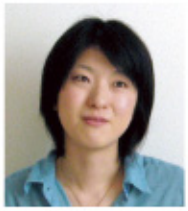
緑と地球環境保護のため古紙100%の再生紙と
植物油インキを使用しています。

表紙写真／原田 直樹

「そよそよ」（H70cm）鉄　2011年



「あふれる風」（H155cm×W320cm×D200cm）鉄　2011年



金属造形作家
吉成 翔子 Yoshinari Syoko

札幌市在住。1986年幌加内町出身。2008年 北海道美術協会展新人賞、'10佳作賞、'11新会友。2009年 遠くを聴く（コンチネンタルギャラリー）。2010年 個展（茶廊法邑）、あな展（北広島市芸術文化ホール）。2011年 北海道教育大学大学院修了、織姫たちのスイーツ・アート（JRタワー プラニスホール）。

アート スペース　吉成翔子さんの作品を、財団事務局内の「アート スペース」で展示しています。お気軽にお越しください。

アートの散歩に出かけよう

小樽・春香山（はるかやま）での野外展「ハルカヤマ藝術要塞2011」と、
帯広・真鍋庭園（まなべていえん）での現代アート展「帯広コンテンポラリーアート2011 ―真正閣（しんしょうかく）の100日―」。
今回初めて開催された2つのアート展に共通しているのは、
「長期間の作家による企画・運営」。
そして「自然や歴史的建造物」を『創作空間』に変え、多くの注目を集めました。
中核となった渡辺さん、池田さんに、お話をうかがいました。

ゴミと廃墟の山をみんなが集う遊び場に

「ハルカヤマ藝術要塞２０１１」は、私が石の彫刻を制作する場所を探していた時、春香山に出会ったのがそもそもの始まりです。春香山には、札幌生まれの彫刻家・本郷新の旧アトリエがあるかと思えば、同時にホテルの廃墟、瓦礫の山もありました。この忘れられた空間をとても興味深く思い、地主の方に相談したところ、非常に乗り気になって貸していただくことになりました。敷地は約９，０００坪もあるので、うまく活用すれば、もう一度ここをゴミの山ではない、みんなが来て、楽しんでくれる空間に出来るのではないかと思ったのです。それが３年前の話でした。

作家にも来場者にも、自由に楽しむ場を与えてくれた

今回の展示には約７，５００人もの来場者がありましたが、最初はそこまで大きな話ではなく、「みんなで遊んで、楽しめる場所」を造ろうと、作家仲間に声をかけたんです。一緒に道を造ったり、熊笹を刈ったり、彫刻を置くところを均したりと、まるで山そのものを開拓するような楽しさがありました。そんな姿を見た地域住民の方々が、興味を持ってくださり、一緒に草刈をしたりして、駐車場を貸していただくまでに交流が深まっていました。

最終的には、道内の作家56人が集まり、彫刻・立体・インスタレーションなどの作品を、自分で場所を決めて展示するという、規模の大きな野外展となりました。創作・展示の希望場所は早い者勝ちだったのですが、参加作家のみんなが不思議と場所を争うこともなく、思い思いに見つけた場所を「切り拓く」面白さを楽しみ、新しい作品を生みだす作家もいました。

また、僕も含め、実行委員のみんなは、「あまり使われないな」と思っていた見通しの悪い所や悪路、天候に左右される環境を、逆に、作家・来場者みんなが積極的に楽しんでくれたことが印象的でした。「朝・昼・夕」の一刻一刻、そして天候が変わっても作品自体の印象が変わるので、それを面白がって、何度も足を運ばれる方々もいました。ディズニーランドのように、リピーターがリピーターをよぶことで、短い間にこれだけの来場者を迎えられたのだと思います。

今回の野外展示が好評を得たのは、作家自身の創作や展示の枠組みを出来るだけはずしてあげて、心から遊び・楽しみ、それが近隣の住民や来場者に伝わったからではないでしょうか。作家から湧き上がる「おもしろい」という気持ちを大事にして、次へつなげていきたいと思います。

▲展示場のゲートの設置風景。
会場造りも、作家や地元の方々が協力しておこないました。

▲池田線さんも野外展に参加。「マスクツリー・ハルカヤマ2011」
道内各地から多くの作家が集まりました。

◀渡辺 行夫「木洩れ紅」。
木と絡み合うようにパイプが組まれ、作品最上部には座るスペースが用意されていました。

ハルカヤマ藝術要塞2011
平成23年7月30日（土）～10月22日（土）
場所／小樽市春香町野外会場

◀池田 緑「My Place on Earth」。
誕生からの日付を、住んだ土地で色わけし、ダイモテープに刻印。1年ごとにパイプに収め、68年の人生を表現。

▲毎週日曜日3時からは、雅楽演奏やダンスパフォーマンスなどの催し物を開催。

帯広コンテンポラリーアート2011
―真正閣の100日―
平成23年5月28日（土）～9月4日（日）
場所／帯広市 真鍋庭園内 真正閣

アートと歴史の交差点

15年の積み重ねから花開いた100日間のアート展

「帯広コンテンポラリーアート2011―真正閣の100日―」は、築100年という歴史を持つ日本家屋「真正閣」で、100日間にわたって、1週間ごとに、作家または作家グループが、リレー方式で入れ替わりで展示し、各々の最終日には、ダンスパフォーマンスやトークなどのイベントを開催しました。これらの企画・運営は、全て参加作家だけでおこなわれたので、今でもしばしば「どうやって実現することが出来たのか？」と聞かれることがあります。

もちろん短期間で、ゼロから立ち上げて出来たことではなく、実行委員を務めたメンバーたちの、15年間という土台があってできたことでした。'97年から、十勝で野外アートを中心にした、現代アートのグループ展が開催されるようになり、以後、ほぼ毎年のように同じようなメンバーで企画したアート展に関わってきました。ですから、今回の展示は私たちにとって、集大成ともいえるものだったのです。

空間に胸を躍らせ新たな挑戦に

「真正閣」のたたずむ「真鍋庭園」は、8haにもなる、日本一の面積を誇る美しい庭園です。昨今のガーデニングに注目が集まる北海道各地。開園前から何台も大型バスが到着し、たくさんの人が訪れました。

今回の展示での驚きは、そういった予期しない観客を大勢迎えられたということでした。また、各最終日に必ず催し物がおこなわれたので、「毎週、日曜日に行けば、何かやっている」と毎回来てくださる近郊の住民の方々もおり、地域の人々の心にも残るアート展になったのではないかと思います。

普段は、現代アートに触れる機会の少ない方々にも、「いま」という時代のアートの現場を、誰の目にもわかる形で伝えられたことに、大きな意味があったのではないでしょうか。

参加作家は、「障子1枚を開けるか、閉めるかで、ガラリと印象の変わる日本建築の自在さに胸を躍らせ、100年の歴史をもつ建物とどう対話するか」、それぞれが問いかけながら展示の仕方を考えました。

そのことが、作家自身の成長に結びついたと思いますし、展示イメージが固定化している、ギャラリーという名前が付かない場所で、アートするという新たな面白さや、可能性に気づく機会になりました。

終えてみて、15年というひと区切りを付けることが出来、私たちの大きな自信につながりました。これまでに築き上げてきた経験をもう一度くずしてみて、組み立て直し、次の新たな挑戦に向かっていきたいと思います。

帯広コンテンポラリーアート2011実行委員長
現代美術作家
池田 緑 Ikeda Midori

PROFILE

北海道教育大学釧路校を卒業後、国語教師として帯広に赴任。'93年に教職を辞し、創作に専念。ジーンズ、流木、マスク、ダイモテープなどを用いた現代アート作品を発表。'02年道立帯広美術館、'10年道立釧路芸術館で個展開催。

■まちの文化創造事業
ギャラリープログラム

地域のみなさんが参加する自主的・創造的な、美術、文芸、映像等の各種文化発表活動及び普及活動（ワークショップ、レクチャー等）を共催します。
〈例〉
・一般市民が参加し、普及活動を伴う展示会など
・公募キャストによる地域を題材とした映画制作など

ハルカヤマ藝術要塞 2011 実行委員会 代表
彫刻家
渡辺 行夫 Watanabe Ikuo

PROFILE

紋別市生まれ。金沢美術工芸大学で彫刻を学ぶ。'80年から、札幌で高等養護学校教員として陶芸を教えながら、札幌軟石などを使った石の作品を発表。
現在は、銭函にアトリエを構える。'93年本郷新賞受賞。

インタビュー会場協力／ギャラリー レタラ　　写真／西山 大介

特集 The project report

さまざまな自主事業の概要を、わかりやすくお伝えします。

文部科学省、㈶北海道文化財団

コミュニケーション教育フェスタ2011

コミュニケーション教育普及協議会《東日本ブロック》

・平成23年11月18日（金）　・札幌市教育文化会館 4F 講堂　・参加者数：75名

「コミュニケーション教育フェスタ2011」は、子どもたちのコミュニケーション能力の育成に資することを目的として実施されました。コミュニケーション教育推進会議における審議経過報告のほか、苅宿俊文教授による講演、当財団が研究・協力校とした実践校からの発表などがおこなわれました。

講演

ワークショップと学力観

青山学院大学
社会情報学部
教授
苅宿 俊文

社会ではグローバル化が進み、異なる文化や価値観を持つ人たちが関わりあって生きる社会になりつつあります。「多元的共生社会の不可避と不可能」は、現代を生きる全ての人にとって「自分事（じぶんごと）」になろうとしているのです。

これまでの教育では、基礎学力や知識量、知識操作の速度、順応性や協調性を育ててきました。しかし、今の社会で求められているのは、生きる力、多様性や意欲、創造性、個性、能動性、ネットワーク形成力や交渉力と言ったポスト近代型能力です。この、社会の変化と学校のミスマッチを埋めるもの、それがこのコミュニケーション教育での取組みです。

コミュニケーション教育にはさまざまな方法があり、一つに定型化されるものではありません。私は、中でもワークショップの活用に大きな可能性があると考えて研究しています。

教育の現場でのワークショップは、まず、以下の3つで定義されます。

1.協同する場面がある＝協同性
2.即興的な場面がある＝即興性
3.身体を動かす場面がある＝身体性

子どもたちにモノをつくらせる場合、一人ひとりつくらせたほうが喧嘩や意見の違いがなく、かつ早い。

しかしコミュニティをつくり仲間をつくる力を育てるには、協同性が必要です。また、先生がどんどん物事を一方的に進めたり、子ども自身のアイデアを試すことを抑えてはいけません。そして、特定の一人の意見だけでなく、いろんな人の意見を受け入れて変化していく、そういう即興性が必要になります。「頭で考えるだけでなく、身体が感じることを大切にしよう」という身体性も大切。そして、効率性だけを重視するのではなく、ある環境を味わう時間も必要です。子どもたちが考えたり相談する時間は、コミュニティ形成の基本的な力を養う時間です。ここで子どもは没入する気持ち良さを味わい、夢中になることを体感するのです。

さて、これらに加えて、

4.一人称で語る（考える）場面がある＝自己原因性

も、重要な定義です。自己原因性は、自己有用感とも呼ばれます。「物事の答えが自分の中にある、自分は何かの出来事の発信源になれる」という感覚です。自分がその事柄の中心であれば、「なぜつくるのか、参加するのか」という自分への問い直しができ、「先生や親がやれと言ったから」ではなく、納得しておこなう喜びを味わうことができます。

ワークショップの特質は、「正しい答え（正解）ではなく、自分が納得した答え（納得解）に意味がある」という点です。多元的共生が不可避であれば、価値観の違うものを受け入れて自分たちが納得する答えを出していくことが必要となります。そのトレーニングのひとつがコミュニケーション教育であり、ワークショップが有効的なのです。

大切なのは、子どもたちに自己原因性を失わせてはいけない、ということ。劇でいえば「裏方や脇役だっていなければ困る」という条件を担保して、「君が休んだら出来ない、君が必要なんだよ」と、子どもに伝えてください。それが、子どもたちの自己原因性の獲得につながります。

コミュニケーション教育のワークショップが、「なぜ芸術体験なのか？」という質問をよくいただきます。

演劇やダンスなどの芸術表現には、どう表現すれば、おもしろさや素晴らしさが伝わるかについての正解はありません。コミュニケーション教育におけるワークショップの特質は、納得解と自己原因性であり、芸術との親和性が高い。だから、協同で出来る演劇やダンスなどのワークショップの手法を通して、コミュニケーションを学ぶことが可能になるのです。もう一歩踏み込んでいえば、ワークショップでは、例えば演劇という方法を通して、コミュニティ形成、つまり仲間づくりの困難さを学ぶことも目的となります。

教科の授業とワークショップは、異なる学習観を土台にしています。大きな違いは『ワークショップでは、学習の後で知識が獲得されていなくてもいい』ということです。

これは、次の3つの学習観で説明できます。「できる」ということで象徴される「行動主義学習観」、「わかる」ということで象徴される「認知主義学習観」、「分かち合う」と

Kariyado Toshibumi
苅宿 俊文

18年間の公立小学校教諭や大東文化大学大学准教授などを経て、コミュニティ形成と、学習環境デザインの場としてのワークショップを研究している。コミュニケーション教育推進会議教育ワーキンググループ委員。

いうことで象徴される「社会構成主義学習観」です。

「できる」というのは、例えば掛け算の九九。条件反射的に、理由を考えずに覚え込むものです。

「わかる」という行動主義的学習観は、例えば分数の割り算のときに、割るほうの分数の分母と分子を逆にして、掛け算することについて「なぜそうなのか」と理由を考えるものです。

この「できる」と「わかる」という知識獲得型の両輪が、私たちの学校教育の基本的な形です。

加えて'90年代から、「分かち合う」を重視する、参加型の社会構成主義学習観が登場しました。これは、対話的実践としての学習を進めていく授業のことで、協同的な学びです。

演劇のワークショップでは、正解がない中で、「どう表現するのか」の意見交換・対話が重要になります。演劇でやりたいこと、伝えたいことをみんなで構成しつくりあっていく、これが社会構成主義学習観です。つまり、他者との相互作用を通して、意味を構成していく行為を学習として捉えているのです。

他者との相互作用とは、子ども同士の交流です。交流は、関係的に動き、共感性、互換性、排他性が混在したものであることが望ましい。そして、主体的に動くためには、動きたい欲求の生成と受け皿が必要であるため、それを提供するのがワークショップ型授業になります。

グループワークで意味を構成していくとき、仏頂面のままかかわることは出来ないので、ワークショップは一見すると、楽しく遊んでいるように見えます。しかし、きちんと授業として設計されていて、「意味を構成していく時のコミュニケーションは、互いに認め合っている関係の中でやっていきましょう」ということを学んでいるのです。

協同的な活動を通したコミュニケーション能力、つまり、ただ仲よくするだけでなく、自分の意見を持ちつつ、他の人と合意を形成していくことは、これからの多元的共生を生き抜くための基本的な資質です。ぜひ、協同して意味を構成していく「分かち合い」の学習への理解を深めていただき、方法としてのワークショップを活用していただければと思います。（抜粋）

事例発表

北海道文化財団「コミュニケーション教育研究・協力事業」指定校

札幌市立 あいの里西小学校

札幌市立
あいの里西小学校
校長
谷山 圭子

当校では、コミュニケーション能力の育成と、表現力の向上などを目的に、「あいあいステージ」というステージ制作を、平成22年度からおこなっています。今年度は6年生全員の取り組みとして、札幌の劇作家・演出家の清水友陽さんに協力いただき、アーティストとの連携によるワークショップを、合計24時限、計12回に渡っておこないました。清水さんたちと担任が相談し、子どもたち全員が劇作に携われるよう、6年時に実施している職業体験（インターンシップ）の思い出を、各自3つ書いて並べて劇をつくっていく、という方法を試みました。

ワークショップ導入期の一学期は、シアターゲームという演劇的手法を用いた、非言語的コミュニケーションの表現方法などを体験しました。

展開期（二学期）は、まず、体育器具などを使って、体育館に地域のエリアマップをイメージした表現に挑戦。これは職業体験に向けて、職業の予想イメージを形成することにも役立ちました。続いて、実際の体験に基づいて、班ごとに台本や場面構成を考え、劇の創作をしました。アイデアを出し合って小道具製作もおこないました。

最後に振り返りとして、導入時と類似のワークショップを実施したところ、当初に比べ生徒の自主性・積極性、柔軟な発想力の芽生えがあり、自分と他の人の考えを表現するアプローチに変化がありました。また、「自分の考えを伝えられるようになった」「みんなで協同するという体験が楽しかった」などの感想がありました。

劇の創作場面毎には、大人の目からは「こうしたほうがおもしろい、効率がいい」と感じる場面が多々ありましたが、大人はあえて整理せず、ヒントをなるべく与える、という共通認識をもって取り組みました。

子どもたちの制作が大変盛り上がった結果、上演が2時間もの大作となり、小道具も膨大な数になりました。さらに、校内発表後、地域の方々に公開する「あいあいステージ」までの間に、子どもたち自身の発案でセリフや動き、小道具を変え、進化した作品として上演しました。このことからも、子どもたちの自主性、協同性、創造性の獲得に大きな成果があったと感じています。（抜粋）

子どもたちのコミュニケーション能力を育むために

（文部科学省からの「配布資料」より概要抜粋）

(1)取組の効果

○他者認識、自己認識の力の向上　○「伝える力」の向上　○自己肯定感と自信の醸成　○学習環境の改善　○授業改善や学級・学年経営への効果

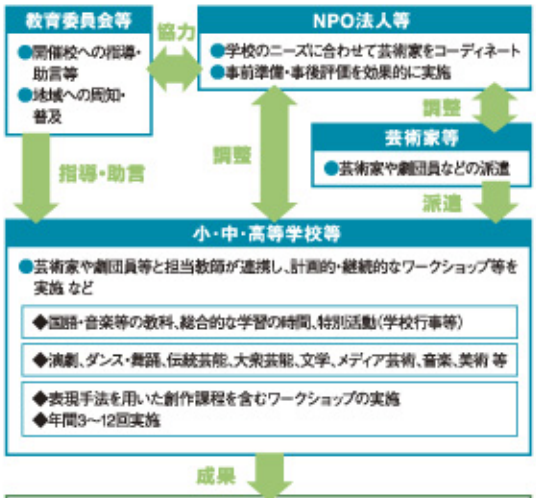
(2)効果的な手法・方策

○実施に当たっては
- グループ単位（小集団）で協働して、正解のない課題に創造的・創作的に取り組む活動を中心とするワークショップ型の手法をとること
- 演劇的活動など表現手法を豊富に取り入れていること
- ワークショップの理論や手法を備えた芸術家等の外部講師が授業に参画することが大事である。

○発表を目的化せず手段として位置付け、創作やグループでの話合い等といった活動の過程を重視すること
が重要。その際、ワークショップでは「導入過程」「展開過程」「ふりかえり過程」という要素をもったプログラムを意識的に取り組んでいく必要がある。

平成23年度
「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」について
（文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」のメニュー）

芸術家による表現手法を用いた計画的・継続的なワークショップ等の実技指導を実施することにより、芸術を愛する心を育て、豊かな情操を養うとともに、コミュニケーション能力の育成を図る。



（文部科学省初等中等教育局）
コミュニケーション教育推進会議
- 演劇・ダンス等の芸術表現を用いた学習プログラムの開発

（その他期待される効果）
- 国語をはじめとする各教科の学力向上　・問題行動への効果的対応　等

※なお、11月18日～20日にわたっておこなわれた当財団の関連事業の内容につきましては、次号で掲載します。

stage

「文化の宅配便」から、「バレエ」の魅力を紹介します。

ユニット・リトルバレエ

大空町東藻琴公演

平成23年10月27日(木)
会場／大空町東藻琴農村環境改善センター

バレエを丸ごと楽しめる公演。

「平らな床があれば、どこででも踊ります」。

そんな言葉をキャッチフレーズにした「ユニット・リトルバレエ」は、「文化の宅配便」事業をおこなうため、道内のプリマ・ソリスト級のダンサーで構成された、本格的なバレエを上演するユニットです。劇場がない地域でも、バレエを気軽にみる環境をつくりたいという思いから、'02年に結成されました。

バレエの最もポピュラーな見所といえるシーンばかりを、次々と上演する公演と、事前におこなわれるバレエのレッスン体験などが人気となり、道内各地から広く要望が届けられています。

今回の開催地となった大空町でも、事前に経験者や初心者クラスに分かれたワークショップを開き、公演プログラムでは、誰もが知っている優雅な「白鳥の湖」や、チョ

▲「フィナーレ」

▲「四羽の白鳥の踊り」

ユニット・リトルバレエ 大空町東藻琴公演プログラム

1. バレリーナのレッスン風景
2. パ・ド・カトル
3. 「ジゼル」より
   ジゼルのヴァリエーション(第1幕より)
   ジゼルのヴァリエーション(第2幕より)
4. 「エスメラルダ」より
   エスメラルダのヴァリエーション
5. 「海賊」より
   メドゥーラのヴァリエーション
6. 「ドン・キホーテ」より
   キトリのヴァリエーション
7. 「白鳥の湖」より
   四羽の白鳥の踊り
   オデットのヴァリエーション
8. 「眠れる森の美女」より
   フロリナ姫のヴァリエーション
9. 「ザ・スポーツ」
10. 「レ・シルフィード」より
    プレリュード
11. 「くるみ割り人形」より
    Ⅰ.スペインの踊り(チョコレートの精)
    Ⅱ.中国の踊り(お茶の精)
    Ⅲ.ロシアの踊り(トレパック)
    Ⅳ.金平糖の精
12. フィナーレ

バレエを、より深く知って、もっと身近にするために

ユニット・リトルバレエ 代表
鈴木 里恵

バレエの魅力とは、ごまかしのない「美しさ」ではないでしょうか。ダンサーはそのために日々鍛錬を重ねていますが、北海道にはバレエを気軽にみる場所・機会がまだまだ少ない現状にあります。「ユニット・リトルバレエ」は、幅広い年代の方々に「美しい」バレエをもっと身近に感じてもらうため、紙芝居でのバレエ紹介や、体の仕組みをわかりやすく説明するなど、さまざまな工夫を凝らしています。

今回、公演プログラムを一新し、演目を歴史順に上演。解説を加え、より深くバレエを知ることができる流れをつくりました。運営を始めて10年、「興味を持ってもらう」から「より深く知ってもらう」という次の目標を掲げて、多くの人々にバレエを楽しんでいただけるよう活動を続けていきたいと思います。

コレートの精・金平糖の精などが踊る、子どもに人気な「くるみ割り人形」のハイライトなどを上演。

また、ステージでの踊りだけではなく、バレリーナのレッスン風景も紹介しました。舞台に置かれたバーを前に、ステップやポーズの名前などを解説。トゥシューズをゆっくりと履く場面は、子どもたちの目を釘付けにしました。衣装の試着体験や衣装展示もおこなわれ、「みる・知る・体験する」をたっぷりと味わう公演となりました。

▲試着を体験した人には、公演終了後に記念写真がプレゼントされました。

▲実際に身につける衣装やシューズなどをロビーに展示。

▲バレエレッスン体験は、大人・経験者クラスと子どもの経験者クラス、初心者クラスが設けられました。

▲「ザ・スポーツ」
クラシック・バレエ以外も上演。

▲「ジゼルのヴァリエーション（第２幕より）」
「ジゼル」はロマンチックバレエの最高傑作といわれています。

▲「ロシアの踊り（トレパック）」
お菓子の精が主人公クララを歓迎する踊りです。

■文化の宅配便

道内の各地域において、芸術鑑賞など広く文化に接する機会を拡充していくため、地域文化の拠点となる公立文化ホール等の施設が無いなど、鑑賞環境が整備されていない市町村において、鑑賞公演とともにレクチャーやワークショップ等を組み合わせた事業です。

写真／西山大介

地域からのお便り

From SAPPORO

地域でおこなわれているユニークな活動の紹介を、寄稿文でお届けします。

文化交流事業「発信交流事業（助成）」

台風接近の沖縄で感じた"演劇の底力"

劇作家・演出家 イトウ ワカナ

◀30分間、舞台上で次々と食べる榮田、その食べっぷりに各地の観客は息を呑んだ。

「大阪・in→dependent theatre」で毎年11月におこなわれている、"最強の一人芝居フェスティバル"「INDEPENDENT」。こちらに'10年11月、私の作・演出で、「劇団千年王國」の看板女優、榮田佳子が演じる、「0141＃3088」という作品で参加し、'11年、「INDEPENDENT」の過去5年間の計60作品から、10作品を選び全国7都市ツアーをするという、「INDEPENDENT 2nd Season Selection ジャパンツアー」に選ばれ、私たちは大阪、東京、札幌、沖縄で公演しました。

大阪のみならず、さまざまな地域で活躍する俳優さん、作家さんたちとの日々は、非常に刺激的で、各地のお客様も本当にあたたかく迎えてくださいました。

しかし、劇場でお客様と会うまでは、やはり不安があります。温度が違うんです。土地の温度というのでしょうか。中でもまったく予想できなかったのが、ツアー最終地、沖縄でした。肝を据えていくしかあるまいと、出発準備を進めていたその時は、出発の2日前でした。

先に沖縄入りしていた大阪のスタッフさんから電話があり、機材を運ぶ車を乗せたフェリーが、台風の影響で、鹿児島沖で停泊しているとの知らせです。車両には、公演で使用するあらゆるものが積まれています。照明、音響、映像機材、さらに出演者たちの小道具。突然、私たちは公演するためのモノが何もない状態になってしまったのです。すべて、海の上。それでも私たちは公演をおこなうつもりでした。先に沖縄入りしたスタッフさんたちは、道具を揃えるため奔走。ないものは手作りです。照明、音響機材も沖縄の出演者の伝手（つて）でなんとか借りることができました。台風が心配でしたが、私と榮田も無事沖縄に到着。

公演にかかわるすべての人の力と、各地のお客様、演劇関係者の皆さんの応援で、沖縄公演は見事、幕を開けました。機材の車両は本番に間に合いませんでしたが、「演劇の底力」というのか、クオリティはまったく問題なく、沖縄のお客様にもご覧頂けたと思っています。

北海道から沖縄へ演劇をしに行くという経験も、滅多なことでは出来ないのに、こんなことが起きて、すっかり精神的に鍛えられました。自分たちのフランチャイズ以外で公演をおこなうことは、勿論大変ですが、それ以上に得るものは大きいと感じています。

今は、日本中にいる演劇の仲間たちを思いながら、創作に励む日々です。その日々がまた楽しく、刺激的なのです。私のJAPAN TOURはまだ終わっていないのかもしれません。

劇作家・演出家 イトウ ワカナ

札幌市出身。'00年より札幌の劇団で俳優として活動を開始。'06年、「intro」を結成し劇作家、演出家としてのスタートを切る。'09年に正式に劇団化。"ファンタスティック毎日"を心のテーマとし、奇抜なポップ感覚で非日常を感じさせながらも、日常的な言葉の数々を駆使した、ファンタジーとリアルの同居する世界観を繰り広げる。その一方で、普遍的な家族の会話劇や、コンテンポラリー演劇と評される詩的作品を創作するなど、作品性は多岐に渡る。

北海道文化財団 自主事業 実施レポート

アートカフェ vol.12

たいらじょう アーティストトーク

実施日 平成23年10月3日（月）
場所 北海道文化財団 アートスペース
参加者 24名

「人形劇×一人芝居」を融合させた独自の世界で観客を魅了する札幌出身のアーティスト・たいらじょうさんが、創作の裏話や舞台芸術の魅力などを語りました。

アルテ ポルト（アートで賑わう港）ミニトーク

「アルテ ポルト」で、その月の展示作家によるミニトークをおこないました。

〈10月〉
展示作家 下沢 敏也
実施日 平成23年10月5日（水）
入場者 23名

〈11月〉
展示作家 渡辺 行夫
実施日 平成23年11月9日（水）
入場者 18名

アート体感教室

石川 直樹「鮭の一生ドキュメント」【浦幌町】

講師 石川 直樹（写真家・冒険家）
実施日 平成23年10月27日（木）
場所 浦幌町立厚内小学校
参加者 全校生徒10名、教諭5名、厚内の漁業関係者5名

「鮭の一生」をテーマに、写真絵本を制作するワークショップの第2回目。今回は子どもたちが撮りためた鮭にかかわる写真や、詩を発表し、写真絵本の章立てや、レイアウトなどについて話し合いました。また、地域の漁業関係者を招き、鮭の受精体験や、厚内の鮭についての取材もしました。

文化の宅配便

From TOHOKU

アートのチカラ

東日本大震災の被災地でおこなわれている、文化芸術活動による地域復興。アートNPOやアート事業にかかわる方から寄せられた、"現在進行形"の声をお届けします。

市民の力とアートが交わる場を目指して

八戸ポータルミュージアム コーディネーター 今川 和佳子

◀横丁の空き店舗を使ってのダンス公演（「横丁オンリーユーシアター」にて）

'11年2月、誰もが春を心待ちにするこの季節に、「八戸ポータルミュージアム はっち」は開館した。「はっち」は、観光やアートの力でまちに賑わいを取り戻し、地域を活性化することを目的とした複合型施設で、八戸の観光の見所や産業、祭などを紹介するコーナーに加え、アーティストの滞在型制作をサポートするレジデンス、またギャラリーやシアターなどの発表の場を備えている。そのオープニングを飾るアートプロジェクトとして開催されたのが「八戸レビュウ」。八戸市民と3人の写真家とのコラボレーションによって、八戸に生きる市民88人のストーリーを映し出したもので、多くの人々が参加し、出会い、またそれぞれの絆を再確認することとなった。

開館からちょうど1ヶ月、そんな温かなオーラに包まれた「八戸レビュウ展覧会」会期中に、3.11東日本大震災が発生した。八戸でも沿岸部に甚大な被害が及ぶ中、直接的被害を免れた「はっち」は、市民のみなさんの避難所として4日間開放された。不安な気持ちに押しつぶされそうになる中、周辺の飲食店からは、次々と差し入れが届けられ、避難する人々にふるまわれた。その時現場に漂った安堵感が今でも忘れられない。

以来「はっち」は、さまざまな情況を鑑みながら、「まちを元気にする」というミッションのもと、自粛していた事業を再開。まちを舞台としたいくつかのプロジェクトをおこなってきた。中心商店街のお店の自慢話などを取材して、フキダシ型のシールにして貼り出す「八戸のうわさ2」や、空き店舗を劇場に見立ててコンテンポラリーダンスなどを上演する「八戸横丁酔っ払いに愛を～横丁オンリーユーシアター」など、まちの魅力をアートを通じて再発見し、またその過程で、つくり手や観客の間に目には見えないコミュニケーションの糸が紡がれた。こうしたアートプロジェクトに加え、賑わいを呼ぶ多彩なまちの催しの効果で、開館後の商店街の通行量は、前年比で約1.3倍になるなど、実績も見え始めている。

日々私たちは、アートの力で新しいコミュニケーションを生み出そうと取り組む過程で、多くのエネルギー溢れる八戸の人々に遭遇する。「まちを元気にしたい」とまちに出かけていって、逆に自分たちが元気をもらっていることに気がつく。そんな人々の力に寄り添いながら、「はっち」はこれからもまちとともに活動を続けていく。

八戸ポータルミュージアム コーディネーター 今川 和佳子

東京学芸大学卒業。'08年より、八戸ポータルミュージアム開設準備室を経て、現在、同コーディネーターとして勤務。主に、アーティストと街をつなぐアーティスト・イン・レジデンス事業の企画運営を担当。八戸市出身。 http://hacchi.jp/

木管五重奏団 ウィンドアンサンブル・ポロゴ

【喜茂別町】

実施日 ワークショップ：平成23年10月20日(木)
公演：平成23年10月20日(木)

場所 喜茂別中学校

参加者 公演130名、ワークショップ29名

【初山別村】

実施日 公演 平成23年11月17日(木)

場所 初山別自然交流センター

参加者 公演150名

若手芸術家発表事業

HAFアーティスト

能登谷 安紀子（ヴァイオリン）

【砂川市】

●コンサート

実施日 平成23年11月5日(土)

場所 砂川市地域交流センターゆう大ホール

入場者 100名

●アウトリーチ

実施日 平成23年11月6日(日)

場所 砂川市立病院多目的ホール

対象者 患者さん、一般

入場者 160名

トリオ・アンジュエ
小林佳奈（ヴァイオリン）／長谷川加奈（ヴァイオリン）／谷敷さなえ（ピアノ）

【京極町】

●コンサート

実施日 平成23年11月14日(月)

場所 京極町生涯学習センター湧学館視聴覚室

入場者 70名

●アウトリーチ

実施日 平成23年11月14日(月)

場所 京極中学校

対象者 全校生徒

入場者 100名

広尾町（ひろおちょう）

http://www.town.hiroo.hokkaido.jp/

人から人へ、そして一人から大勢へ。
生活シーンでのアートの可能性は、人を通して無限に広がっていきます。
地域の文化力を支えている、道内の町や村の活動者を紹介します。

メンバーで手作りする押し花キャンドルは、北欧のようにキャンドルを灯す暮らしを提案しようと始めました。
クリスマス時期は、町内の大丸山森林公園「サンタの家」で、来町者を温かく迎え、思い出づくりのお手伝いをしています。

サンタの夢と希望を届けたい

広尾サンタランド推進委員会 会長
武藤 敏広さん Muto Toshihiro

広尾町は、サンタクロースの故郷ノルウェーのオスロ市が、国外で初めて認めた、日本唯一のサンタランド。全国にサンタの世界が持つ愛や夢、優しさを伝える活動を昭和60年からおこなっています。

武藤さんが会長を務める広尾サンタランド推進委員会は、サンタランドを軸に町を盛り上げようと、住民有志が平成5年に結成しました。クリスマスシーズンに来町した方々のおもてなしや、押し花キャンドルの製作体験指導など、主に町外に向けたPRを担っています。

「皆、自分の仕事と両立しながらの活動ですが、町を活気づけたいという想いは一つ。ほかの自治体のイベントを視察したりしながら、町のために出来ることを常に考えています」。

この冬は、町の中高生の協力を得て、東日本大震災で被災した東北の子どもたちに、1,600通ものクリスマスカード「サンタメール」を送る取り組みも。サンタをきっかけに、1人でも多くの人に広尾の良さを知ってほしいと、これからも夢と希望を届ける活動を、縁の下から支え続けます。

全国に誇れる自慢の素材を通して

広尾町おいしい町づくりの会 代表
土谷 典男さん Tsuchiya Norio

広尾の特産物を多くの人に食べてもらい、町を元気にしたい。

そんな志を持つ住民約40人が立ち上がり、平成22年3月、食による地域おこしのグループ「広尾おいしい町づくりの会」が発足しました。その代表としてメンバーを引っ張るのが、中華料理店を営み、広尾町商工会サービス部会の部会長でもある土谷さんです。

最初に取り組んだのは、商工会プロジェクトの新しいメニュー開発。何度も試食を重ねた末に、全道一の水揚げを誇る、"シシャモ"を使ったライスコロッケ「しゃロッケ」が誕生しました。「『これは何？』と引きつけ、広尾を知るきっかけになるようなメニューを目指しました」という狙い通り、「しゃロッケ」を使ったバーガーを町のイベントで販売するや、一躍、人気商品に。秋に帯広でおこなわれたグルメイベントでは大賞に輝き、大きな手応えを感じたといいます。

町内でシシャモ料理を食べ歩いてもらう企画「ししゃもラリー」では、その反響に参加店からも喜びの声が上がりました。「食に恵まれた広尾は、胸を張って自慢できる町なんです」。郷土愛を原動力とした挑戦は、着実に地域を動かし始めています。

ゆでたシシャモをほぐし、ホワイトソースで和えたライスコロッケ「しゃロッケ」。土谷さんの店など町内6つの協賛店で、それぞれ個性的に仕上げた「しゃロッケ」メニューを味わうことができます。

取材・文／加藤 和代
写真／西山 大介

広尾町ゆかりの文化の担い手たち

[広尾陶芸サークル 代表]
岩田 愛香さん Iwata Yoshika

「陣屋窯」を主宰し、30年前から旧広尾小学校校舎を拠点に活動を続けるサークルの3代目代表。2年に一度、即売を兼ねた作品発表会を開き、好評を得ています。

[自然写真家]
辻 博希さん Tsuji Hiroki

生まれ育った広尾を中心に、十勝の風景や、野生動植物などを撮り続けています。'09東川町国際写真フェスティバル ストリートギャラリーコンテストで準グランプリを受賞。

[切り絵作家]
平本 哲哉さん Hiramoto Tetsuya

平成5年、広尾町職員として勤めていた図書館で工作教室を開いたのが、切り絵との出合い。サンタの切り絵で町のPRに一役買っているほか、町内外での講師や展示会と、精力的です。

[十勝神社御輿会 組頭]
武藤 敏行さん Muto Toshiyuki

十勝管内最古の社の御輿を守るため、平成6年に結成。会員ら約50人の担ぎ手が、市街を練り歩く秋祭りの渡御で、陣頭指揮を執り、5年後の創建350年に向け盛り上がっています。

人形劇に子どもたちへの愛を

らっこ座 代表
杉本 伸子さん Sugimoto Shinko

「らっこ座は、自分の子どもたちに、人形劇や紙芝居などを生でみせてあげたい、と願うお母さんたちで発足したサークルなんです」。

2代目の代表を務める杉本さんは、平成4年に結成したきっかけを、こう振り返ります。町内で、子ども向けの文化的な催事が少なかったことから、手探りで活動し始め、現在は、年に数回の公演を、たくさんの子どもたちが楽しみにしています。

人形劇と紙芝居のほかにも、布製の人形をポケットから出すエプロンシアター、布を貼った板に人形の絵を貼りながら話を展開するパネルシアターと、徐々にレパートリーを増やしてきました。大・小の道具は、ほとんどがメンバーの手づくり。名作をアレンジしたり、人気のキャラクターを織り交ぜて上演するなど、母親ならではの目線で舞台を仕上げています。

一番の励みは、子どもたちの喜んでくれる姿。「家族の協力や、和気あいあいとした雰囲気を大切にしながら、頑張り過ぎないことが、長く続ける秘訣でしょうか」と笑う。公演をみた親子の中に未来の演じ手がいることを願い、次世代への橋渡しに大きな期待を寄せています。

定期公演は、町立図書館や町立病院、小学校の特別支援学級などで、年に5回ほど開催。
クイズなど参加型の演目や、しっとりした物語を織り交ぜるなど、親子で一緒に楽しめるプログラムを工夫しています。

豊かな自然を糧に、北の大地ならではの食文化を育む北海道。地域の食育活動を紹介します。

広尾町の食育

親子で楽しみながら、酪農や牛乳について知る機会を

十勝の最南端に位置する広尾町は、漁業と並び、酪農を中心とした農業も盛んです。

この町で、独創的な食育活動に取り組んでいるのが、酪農家女性グループ「豊栄会」。十勝農業改良普及センターの呼びかけで、昭和63年に農業簿記の勉強会として発足し、平成19年から食育をテーマに活動しています。

この会のユニークな点は、牛乳にだけ焦点を当てるのではなく、酪農の仕事や暮らし全般を伝えたいという考えと、その手法にあります。「酪農が実際どんな仕事なのかは、あまり知られていません。それをどう伝えるか考えた結果、出来たのが『らくのうかるた』でした」と、会の広報を担当する山本和美さん。

「ねえ知ってる? 牛は胃もおっぱいも4つある」「うんちだって、はたけの大事な栄養です」。1年半かけて制作したかるたは、十勝管内の保育所や幼稚園130カ所以上に無料配布すると、「分かりやすい、面白い」と一躍評判に。平成22年度、北海道の「女性・高齢者チャレンジ活動表彰事業」で優秀賞にも選ばれました。

現在は、脚本も人形も手づくりの人形劇「子牛のちっちゃな大冒険」を、町内で公演しています。「すごろくや、大型紙芝居もやってみたいし、活動の場も広げたいですね」。元気な酪農家のお母さんたちは、早くも次の目標を見据えています。

▲大人も新しい発見があるよう、読み札には一枚一枚に酪農豆知識をつけました。

▲「酪農のことを少しでも知ってもらえれば」と、山本さんはじめ11人のメンバーが精力的に活動しています。

Report 1

平成22年度の「まちの文化創造事業」の共催事業から、特徴的な団体の活動を紹介いたします。

まちの文化創造事業・シアタープログラム

空知 そらち演劇フェスティバル実行委員会

空知エリアのホール運営団体が連携
地域の劇団が集まる演劇フェスティバルを開催

「砂川市民劇団 一石」(砂川)

「空知全体の演劇活動を盛り上げよう」との狙いでスタートした、「そらち演劇フェスティバル」。空知にある、文化センターやホールの運営者による組織「空知ホール協議会」での話し会いから、深川・滝川・砂川・美唄・新十津川・奈井江・岩見沢の5市2町の参加による実行委員会が組織され、平成22年12月記念すべき第1回が「砂川市地域交流センターゆう」で開催されました。

作品を上演したのは、平成19年に「砂川市地域交流センターゆう」の開館にあわせて組織された「砂川市民劇団 一石」と、深川市内の4劇団の団員によって結成された「深川組☆48」。そして、近年は演劇活動が停滞気味だった滝川と美唄から、フェスティバルにあわせて結成された「たきかわ市民劇」(滝川)と「劇団WA!」(美唄)が参加し、4団体の上演が実現しました。

「企画・制作・広報宣伝や、舞台技術(音響・照明・道具)などについても自前でまかなう、いわば「全て手作りの演劇公演」。それを複数のホール運営者が連携して実施するのですから、最初は仕事のスタイルや、進め方の違いなどをすり合わせるのが大変でした」と、第1回フェスティバル実行委員会の事務局を務めた「NPO法人ゆう」の八巻公史さんはいいます。しかし、互いの手法を学ぶなどの成果も多く、多いに刺激になったのだそうです。さらに「札幌圏を中心とした道内の演劇関係者、報道関係者に注目されたこと。また、多くの人たちに鑑賞していただいたことは、空知では大きな出来事。ホールにとっても、劇団にとっても、よいPRになった」と八巻さんはいいます。

「空知には、演劇を観る習慣がない人も多い。フェスティバルがきっかけになれば」と、ホールロビーで、参加市町のご当地グルメを販売するなどの工夫をして、「閉ざされてない会場、気軽に入ってもらえる空間」を演出。延べ人数で1,000人を越える来場者を集め、第1回のフェスティバルは大成功を納めました。

今年、平成23年12月10日・11日には、「たきかわ文化センター」で第2回を開催。昨年の4団体に加えて、恵庭市の市民劇団「Sunday Play Project」によるゲスト上演があるなど、取組みはさらに発展をみせています。

「各団体とも、年に1回の地元公演にあわせて脚本を用意し、制作を進めているため、なかなか出演の調整が難しい。でも、今後は、可能であればゲスト上演や参加団体も増やしていきたい」と、第2回事務局を担当している「NPO法人空知文化工房」事務局長の長田千秋さん。

「音楽劇の上演などであれば、音楽に特化しているホールでの開催も可能になる。空知のゆるやかな連携を拡大して、空知の人たちが年に1回、地域ならではの演劇を楽しむ文化が定着してくれれば」。地域における演劇文化の興隆に向けて、取り組みの継続が期待されています。

「深川組☆48」(深川)

■まちの文化創造事業 シアタープログラム

地域のみなさんが参加する自主的・創造的な、音楽・演劇・舞踊等の舞台発表活動及び普及活動(ワークショップ、レクチャー等)を共催します。

・公募キャスト、スタッフによる市民参加の舞台公演など
・複数地域から参加する演劇祭、音楽祭など

そらち演劇フェスティバル2011
平成23年12月10日(土)～12月11日(日)
場所／たきかわ文化センター 大ホール
(平成23年度事業)

information 各種事業の案内

アート体感教室

長谷川仁「羊蹄山に降りつもる」

講師　長谷川 仁（美術家）
場所　真狩村公民館
開催日　平成24年1月12日（木）～13日（金）
内容　真狩村の自然「羊蹄山」をテーマとした造形ワークショップ

石川直樹「鮭の一生ドキュメント」

講師　石川直樹（写真家・冒険家）
場所　浦幌町立厚内小学校
開催日　平成24年1月19日（木）～20日（金）
内容　「鮭の一生」をテーマに、写真絵本を制作するワークショップの第3回目。

若手芸術家発表事業

HAFアーティスト

トリオ・アンジュエ
小林佳奈（ヴァイオリン）／長谷川加奈（ヴァイオリン）／谷敷さなえ（ピアノ）

【釧路市】
●コンサート
場所：釧路市民文化会館
日時：平成24年1月26日（木）18:30開演
●アウトリーチ
場所：釧路市立光陽小学校
開催日：平成24年1月27日（金）

【壮瞥町】
●アウトリーチ
場所：壮瞥町特別養護老人ホーム（第2長日園）
開催日：平成24年2月13日（月）
●コンサート
場所：壮瞥町地域交流センター
日時：平成24年2月14日（火）18:30開演

平成23年度北海道舞台塾公演

シアターラボ プレ公演

北海道舞台塾は、広く道民に質の高い演劇を提供し、演劇文化の浸透と舞台芸術の活性化を図るとともに、地域の舞台芸術活動を担う人材を育成することを目的として演劇公演の創作を行う事業です。
本年度は、道内の若手演劇人のスキルアップのため、道外で活躍している劇作家・演出家をドラマドクターに迎えて、脚本、演出などに指導をいただきます。1月にプレ公演を行い、ドラマドクターの指導を受けてブラッシュアップさせた作品を3月に発表します。

■プレ公演日程
平成24年1月21日（土）
14:00　Man-Hall／リリカル・バレット
☆16:00　微睡っこしいの、／パインソー
☆18:00　言祝ぎ／intro
平成24年1月22日（日）
14:00　言祝ぎ／intro
☆16:00　Man-Hall／リリカル・バレット
18:00　微睡っこしいの、／パインソー

☆＝終演後にドラマドクターと演出家によるアフタートークがあります。

■ドラマドクター
畑澤 聖悟（渡辺源四郎商店／青森）
福原 充則（ピチチ5／東京）
御笠ノ 忠次（案山子堂／東京）

■会場
生活支援型文化施設コンカリーニョ
（札幌市西区八軒1条西1丁目 ザ・タワープレイス1F）

■チケット取り扱い
ローソンチケット（ローソンLコード 18405）
チケットぴあ（ぴあPコード 417-795）
大丸プレイガイド
※公式ホームページ内に予約フォームもございます。
http://www.haf.jp/~butaijyuku/

●シアターラボ本公演

■本公演日程
平成24年3月7日（水）～11日（日）

■会場
生活支援型文化施設コンカリーニョ
（札幌市西区八軒1条西1丁目 ザ・タワープレイス1F）

※本公演の詳細は、ホームページをご覧になるか、当財団にお問い合せください。

Report 2

まちの文化創造事業・シアタープログラム

旭川市　劇団「BREATH」

旭川での創作活動15年の集大成
旭山動物園の再生をオリジナル・ミュージカルに

今や北海道が誇る観光スポットとなった旭山動物園。一時は廃園の危機に遭いながら、職員らの努力によって全国区の動物園へと再生した物語を上演したのが、劇団「BREATH」の15周年特別公演「NEVER …未来へつなげるものは」です。

劇団「BREATH」は、平成8年、「旭川を文化芸術発信拠点として創造しよう」との考えから、当時の旭川市社会教育委員会部長、旭川市民文化会館館長、そして劇団「BREATH」の代表である森禎宏さんとの話し会いで「官民一体型モデル団体」として発足しました。森さんが音楽関係のイベントを手がける仕事をしていたこともあって、当初はミュージカル団体として発足し、平成9年に近未来の旭川を題材にしたミュージカルを上演。その後、演劇、ダンスなど多岐にわたる創造集団へと進化し、不定期ながら継続して活動を続けてきました。

主に旭川周辺や、日本史を題材にした作品を上演してきた劇団「BREATH」が、記念すべき15周年公演の題材として旭山動物園を選んだ理由について、自ら脚本を手がける森さんは「旭川の宝物である旭山動物園の軌跡を、私たち市民の手で描きたかった」といいます。

また、「行動展示施設だけではなく、環境保全、生態系の再生、道内に棲息している動物の観察・保護、絶滅危惧種の保護に力を入れている事実を、ミュージカルを通して旭川市民、いや全国の皆さんに分かりやすく伝えたかった」とのこと。245万人だった来園者が26万人に低迷していた平成8年当時に舞台を設定し、職員らが奮闘する様子をファンタジータッチのミュージカルで展開。脚本の監修は、旭山動物園の園長である坂東元さんが担当しました。

これまでの公演同様、公募で集まった地元の大学生や会社員が熱演。2回の旭川公演では約2,300名、東京公演では800名が来場しました。

「舞台は観るだけではなく、心に残る言葉を伝える空間。小菅正夫前園長をはじめ、当時奮闘した方々の思いと言葉を伝えることができた」と森さん。

「再来年には、北海道の先住民族をテーマとした舞台を発表したい」と、地域発の舞台創作への情熱を語ってくれました。

旭山動物園ミュージカル
「NEVER…未来へ繋げるものは」

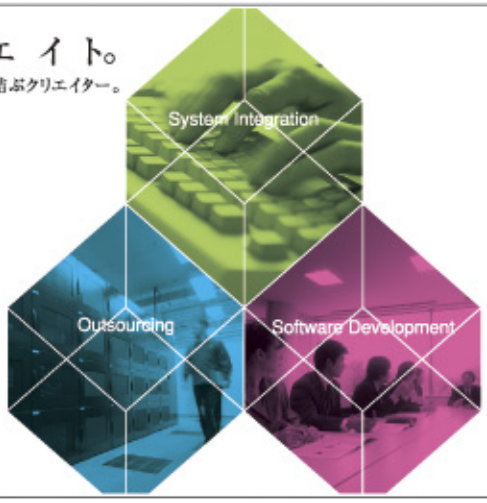
旭川公演　平成22年9月11日（土）～9月12日（日）
場所／旭川市民文化会館 大ホール

東京公演　平成22年10月23日（土）
場所／新宿文化センター 大ホール

北のくらし
No.91 JAN 2012

ＩＴで未来をクリエイト。

私たちHBAは、お客様とお客様の未来を先進のITで結ぶクリエイター。



●システムインテグレーション事業
求められるニーズに対し基本設計から保守に至るまで総合的なソリューションを行います。

●アウトソーシング事業
万全のセキュリティ対策で、お客様の事業における情報化投資の削減をサポートします。

●ソフトウェア開発事業
プロジェクトマネジメント力を生かし、確かな品質と最先端の技術力を提供します。

3つの事業をリレーション。
最適な情報システムの提案、構築、運用を
万全のセキュリティで総合的に行います。

株式会社 HBA
〒060-0004 札幌市中央区北4条西7丁目1番地8
TEL.011-231-8301 FAX.011-281-0915
http://www.hba.co.jp/

ご宿泊 ご宴会 ご婚礼 ご会合

RESTAURANT スピカ
四川飯店
地ドレストラン 〔味の会〕

ホテル札幌カーテンパレス
TEL (011) 261-5311 FAX (011) 251-2938
〒060-0001 札幌市中央区北1条西6丁目（道庁南側）
URL http://www.hotelgp-sapporo.com/

JA共済

安心の充実保障と
頼れるサービスが、
納得の共済掛金で。

★ご自身とご家族の保障
人身傷害保障
搭乗者傷害保障
歩行中等自動車事故傷害保障
介護・自立支援費用保障

★相手方への保障
対人賠償（無制限）
対物賠償（無制限）
対物超過修理費用保障特約

★お車の保障
車両保障（全損害担保）
車両諸費用保障特約

家庭用自動車共済 クルマスター ★★★

●ご加入にあたりましては、お近くのJA（農協）へお問い合わせください。
■ホームページアドレス http://www.ja-kyosai.or.jp サンキューキャンペーン実施中！ 114B1D50267

充実サービスの老舗スパ・サウナ「ニコーリフレ」!!
ロウリュ／天然鉱石風呂／サウナ&水風呂／ボディケア／あかすり／書籍2万冊／TV付きカプセル／充実飲食メニュー／宴会136名!

体感100度の熱風で爆汗体験!
ニコーリフレ名物イベント
ロウリュ

毎日開催 ①13:00 ②14:00 ③15:00 ④16:00 ⑤17:00 ⑥18:00 ⑦19:00 ⑧20:00 ⑨21:00 ⑩22:00 ⑪24:00

毎月7のつく日は なでしこロウリュ

サウナパフォーマンス「ロウリュ」とは
古来フィンランドから伝わる入浴方法で、熱したサウナ石にアロマを含んだ専用の水をかけ、発生した高温の蒸気をタオルで仰ぎ、熱風で一気に発汗を促すサウナパフォーマンスです。ロウリュ特有の熱風の効果で、一気に全身が温められ、大量に発汗することができます。さらにサウナ室内には瞬間的にマイナスイオンが発生し、極上のリラクゼーション効果があると言われています。

リフレのサウナは快適&安全!!

世界初! プラズマクラスター イオンサウナが登場!!
ニコーリフレのサウナは、浮遊力ビ菌等の作用を抑えるクリーンなサウナです。

サウナひとすじ44年 スパ・サウナ カプセル ニコーリフレ
ご予約・お問い合せは tel 011-261-0108
ウェブサイトも充実! www.nikoh.info モバイル www.nikoh.info/mobile
札幌市中央区南3条西2丁目（フロント4F・狸小路2丁目3条通側）
男性専用 24時間営業 年中無休

スパ・サウナ 通常価格 ¥2,000
カプセル 通常価格 1泊 ¥2,700～
手ぶらで来店OK!
※ロウリュご利用の際、AM0時～AM5時の入館、また退館がAM0時を超える場合、深夜料金使¥500。

本誌持参で「スパ・サウナ」が特別価格に!
<通常価格¥2,000のところ>
2012年1月末まで 特別価格 ¥500
※お一人様1回限り
※他券併用不可
※表示価格はすべて税込

財団法人北海道文化財団 〒060-0042 札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル 3F tel.011-272-0561 fax.011-272-0400 http://haf.jp/
制作・印刷 札幌太同印刷株式会社